ピアノ・ソナタ 第2番 イ長調 op.2-2

重厚な第1番、第3番の間にあるこの第2番は優美な雰囲気に満ち、チェンバロを華麗に奏するようなギャラントな雰囲気を持っている。強弱の対比や多彩な転調に若き作曲家の個性が表れており、第3楽章には慣例のメヌエットではなく、スケルツォを置くといったあたりにもピアノ・ソナタをこれまでとは違うものにしようという野心が垣間見える。

ピアノ・ソナタ 第9番 ホ長調 op.14-1

第8番《悲愴》まではタイトルに「チェンバロまたはピアノフォルテのための」という記述があったが、この曲からは「ピアノフォルテのための」となっており、19世紀に差しかかり、ちょうどチェンバロからピアノに移行し、その普及がほぼ済んだ時期に生まれたソナタということがわかる。使われている旋律や音型も、チェンバロでは効果があまり生じないもので、かなりピアノという新しい楽器の響きを意識して創作されている。のちにヘ長調の弦楽四重奏曲（Hess 34）に編曲されるが、ピアノ・ソナタの段階で、すでに四声体を意識して書かれている。

ピアノ・ソナタ 第15番 ニ長調 op.28《田園》

第12番から14番とは対照的に、第1楽章にソナタ形式の曲を持つ、4楽章から成るソナタ。《田園》という通称は初版譜にはなく、1838年の出版譜からつけられていた。ベートーヴェン自身がつけたものではないと思われるが、全体を通してタイトルにふさわしい雰囲気に満ちている。第1楽章と第2楽章がニ長調とニ短調で同主調関係になっていること、終楽章のロンドは第1楽章の保続音の流れを受け継いでいる点などから、全楽章の統一感を出そうとしていたことがうかがえる。

ピアノ・ソナタ 第27番 ホ短調 op.90

《告別》から5年ぶりに書かれたソナタで、全2楽章から成る。ベートーヴェンの2楽章構成のソナタは、通常のソナタからはかけ離れた形式・雰囲気を持っているが、この曲も例外ではない、第1楽章はソナタ形式だが、楽想が次々現れるため、ソナタ形式としては分析しづらい。第2楽章も、同じ楽想が反復

されたり、付点を利用したやわらかい雰囲気の旋律によって展開し、ロマン派を先取りした曲想となっている。

ピアノ・ソナタ 第 23 番 ヘ短調 op.57《熱情》

1804 年に創作が始まったこのピアノ・ソナタは、名作が陸続と生み出された「傑作の森」と呼ばれる時期（1804～14 年頃）のもので、技巧・音楽性ともに充実した作品。1803 年に贈られたエラール社製の最新のピアノは、音域が広がり（68 鍵、5 オクターヴ半）、アクションも変更されて、ダイナミクスが拡大すると同時に音色が深く・重くなった。それにともない、作曲の技法・書法が進化したことはもちろんだが、感情表現の振幅がいっそう豊かになっている。非常に強い音で連続して和音を弾くといった激しい表現が多用されるが、これはエラールの堅牢な作りのピアノだからこそ実現したと考えられる。一つの動機が全楽章を通して使用されるなど、創作手法においても充実した内容を誇る。